

## 令和5年度 かながわコミュニティカレッジ講座 修了生インタビュー

### 「災害ボランティア入門講座」受講

講座実施団体：一般社団法人ソーシャルコーディネートかながわ

今回はかながわコミュニティカレッジ（以下、コミカレ）で『災害ボランティア入門講座』を受講したのち2023年9月に「かながわ災害ボランティアバスチーム」（以下、ボラバスチーム）として秋田へボランティアに参加された高井あや子さんにお話を伺いました。同年7月に発生した秋田県での大雨は未だ多くの人の生活に支障をきたしています。ボラバスチームは1日も早い復興を目指し、秋田県へと向かいました。

氏名：高井 あや子

職業：サービス介助士インストラクター  
防災介助士インストラクター

居住地：横浜市都筑区

#### ～サービス介助士インストラクター、 防災介助士インストラクターとは？～

高井さんはサービス介助士インストラクター・防災介助士インストラクターという高齢な方や障がいのある方などを介助するための人材の育成、資格取得のサポートを行う業務を担っています。そもそもこれらの資格を耳にしたことのない人もいないでしょうか。

「例えばサービス介助士の活躍している場として、駅構内で視覚に障がいのある方に腕や肩を貸した歩行補助、空港で航空会社スタッフによる車椅子ユーザーの介助などが挙げられます。そして防災介助士は災害時に補助を必要とする人にどう対応するか、避難の仕方などの知識を持ち、実践できる人材を指します。これらの資格を取得する人材育成を行うのがサービス介助士インストラクター、防災介助士インストラクターです。」



#### ～長年温めていた計画が実行されるまで～

もともと都筑区で視覚障がい者の方向けに新聞や本などの文字情報を朗読・録音する音声訳ボランティアやブラインドサッカー・パラスポーツ大会受付など積極的に活動をされているそうです。

「職業上のスキルアップも兼ねて地元の消防団に入ったことを機に災害ボランティアに興味を持ち始めました。知識集めの一歩として受講した、かながわコミュニティカレッジの『災害ボランティア入門講座』修了後、ボラバスチームから秋田への災害ボランティア募集のお知らせがあったのです。コミカレで受講した講座で、知識・心構え・現地での作業イメージを事前に習得したことで参加のハードルが下がりました。」

急遽お仕事をお休みするほど、参加に迷いは無かったそうです。

#### ～災害ボランティアバス スケジュール～

夜：横浜集合→バスにて秋田へ出発

朝：数回のPA休憩を挟み秋田へ到着

日中：作業

夜：横浜に向けて出発

翌日朝：数回のPA休憩を挟み横浜へ到着

## ～不安を抱えながらも～

「ボラバスに参加する上で懸念点が全くなかったわけではありませんでした。ぎゅうぎゅうの車内なのかな？男女混合で座るのかな？」

そんな不安を抱えながら、いざバスに乗ってみるとすぐに心配事は解消したそうです。

「車内は1人で2シートくらいは使えて隣の人ともちょうどいい距離が保てました。男女でエリアも決めていただいて移動は快適でした。参加した回は女性参加者が2名だったこともあり、2人で最後列のロングシートを使用させていただきました。現地に着くと作業着に着替えるため、外から見えないよう車内にシートを張るといった配慮を素早く行ってくださり、ボラバスチームの経験値が伺えた瞬間でした。」

## ～あの秋田？～

「災害ボランティア募集時は報道で既に取り上げられなくなった秋田県の現状は想像もつきませんでした。」

担当した現場は1人暮らしの高齢女性宅です。1人で片付けるのは不可能である光景を目の当たりにしました。1階は泥でまみれ、家具は処分の他ない状態。報道されない現実を改めて思い知らされました。ボラバスチームは10名程で1日かけ泥だし

作業を行いました。

ボランティア参加前は女性でもできる作業なのか、女性ということで敬遠されるのでは、と心配でしたが、そのような雰囲気はスタッフ始め、現地でも一切感じられませんでした。現地では個々の出来る範囲の仕事割り振られ、冷蔵庫等の重いものは運べる人が運び、私は食器などの小物を何度も何度も出し運びする作業や泥だしを行いました。真夏の作業という事で熱中症が懸念されていましたが、現場責任者の強制的に、こまめな休憩を取る姿勢が一貫していたため、体調不良者がでることはなかったです。作業スタッフの身の安全に気を配る発言も飛び交っていて和やかな雰囲気の中で作業ができました。」

## ～災害グッズ使えますか？～

持っているだけで安心してしまいがちに災害グッズも使い方を間違えると何も役に立たないものです。

「今回ボランティアに参加するにあたって、以前購入した防災グッズのヘルメットと簡易用トイレを持参しました。事前に使い方を知っておかなくては！と思い、いざヘルメットを被ってみるとぶかぶかだったので、よくよく考えてみると当然かもしれませんが、一般的な大人サイズとして販売されているものが使用者全員にフィットするようには作られていません。簡易用トイレだって使用方法を元々知っているの方が少ないでしょう。世の中に防災グッズを一



通り持っていてなおかつ緊急の時にでもすぐに使えるようにサイズ調整や使用方法が頭に入っている人がどれくらいいるでしょうか。今回のボランティアを通して自身が災害にあつたら、というシミュレーションが出来ました。常日頃から経験することではないからこそ一度起きたら大変です。そんな時に自分が何をして、何をしないのかの選択は経験からしか培えないものだと思います。」

ボランティア活動は与えるだけではなく得ることも多いのだな、と高井さんのお話を伺っていると感じられます。

### ～選択肢は選ぶだけでなく、つくれる～



過酷な場所で肉体労働。今まで災害ボランティアと聞くと男性がメインで動くものとする人は多かったかもしれませんが。では女性参加が阻まれる原因

は何があるのでしょうか？実際に参加してみて性別による作業の優劣はなかったと語っています。

「行く前は女性でも出来る作業なのかな、なんて心配していたんですけど全部が力作業ってわけでもないんです。家屋から小物などを何往復もして運び出す作業は力よりも忍耐力が必要。必要なスキルは多種多様です。興味があっても実行までに行かない人は大勢いると思います。」

懸念点が一つでも解消されれば参加者が増えるのではと考える高井さん。

「例えば募集時に“炊き出し”や“子どもの遊び相手”など作業内容が詳しく書かれていたら、自分が何をやるのか想像できて



ハードルが下がるのではないのでしょうか。女性専用ボランティアバスなんてあつたら安心度が全く違いますよね。元々ある選択肢から選ぶだけでなく、選択肢そのものをつくることも可能なのではと思います。」

実現までの道のりは容易ではないかもしれませんが、新鮮な目線で現場を経験することで見えてくる可能性が、今後の社会を変える手掛かりになるのかもしれない。

令和5年12月6日取材

中里

(かながわコミュニティカレッジ事務局)